

受け継ぎ，実行し，託す

Inherited, Pursuing,
and Going to Pass Over

副会長 大石進一



私の会員番号には74という入会の年が書いてあるので、既に42年間会員であることになる。電子通信学科に入学し、指導教員の堀内和夫先生が本会を中心として活動されていたので、何も迷うことなく本会が私の研究活動の中心となった。先生を父とすれば本会が母であった。先生の本会への貢献は数学、特に、関数解析が電子通信学に役立つということを最初に言い出した一人であったことであると思っているが、それを受け継いで学会活動を行った。大学に就職し、研究活動が活発になるに従って、英文論文誌が世界的な雑誌になり切れていないことに危機意識を持ち、これを世界的な雑誌にするにはどうするかを随分考え、できることをした。また、研究会や大会の機能はとても良いと思ったが、どこか、祭りのな面が多くて、自分の分野の世界の研究者が集まって議論する機能を作る必要があると痛感した。また、大きな学会であっても、意欲的であれば新しいソサイエティができることを信じていた。以上の結果として、例えば非線形理論の専門誌 NOLTA、IEICE の創刊に関わり、また、国際シンポジウムとして NOLTA Symposium の立ち上げに幹事として関わり、運営にも関わった。NOLTA ソサイエティはそれらから広がった研究者の輪によって成立した。しかし、若いときに感じた「本会を活動の中心として選んだときに、世界に通じる研究活動ができるか」という渇きにも似た懐疑を打ち崩すまでには到底及ばないことも実感している。

本会の論文誌は国内では大変な権威がある。しかし依然として世界的に見ればそこに論文を全て投稿してしまっただけでは、世界に通じない。それは当然かもしれない。世の研究者は、良い研究成果が出れば、その分野で一番評価されている論文誌に投稿することが良いとされているのだから。また、国際会議やワークショップにしても、世界に研究者の友ができれば、共にオーガナイズして、その分野の世界的研究者を集めてワークショップを一週間ぐらいにわたって同じ場所で寝泊まりしながら開催して、焦点の当たったテーマについて集中討議するのが普通なのである。

さて、世界の生産の多くはアジアに工場を移したと言われている。日本は後退したように思われ悲観的な空気さえ漂う。しかし、よく見ると日本にはハイテクの芽が次々に芽吹き、それが育っている。それは、日本語で大学院教育まで行え、そこで育った多くの研究者の卵は本会の大会や研究会で多彩な技術者研究者から鋭い質問やコメントを受けて育っているからであると考えている。このような研究者の教育の場としての機能は本会の持つ大きな機能で、日本国内に向けての機能であってもよいのかもしれない。ここを国際化しようとするなら、大学の国際化、特に英語での講義を増やすことから始めなければならないであろう。日本語で教育研究するという日本の教育の転換を考えるかということにつながる。研究会を年に1回ぐらいは海外で行って海外の友達を増やし、国際化を進めるのは一つの有力な策であると思うが、抜本的にはこのような問題に突き当たる。数万人の会員の母なる学会の機能の問題である。

こうして、若いと思って、がむしゃらに、学会の中で42年間動いてきたが、どうしても飢餓感は拭えない。次世代の若者に思いを引き継いでいって頂くしかないをつくづく感じている。来年、本会は100周年を迎えるが、学会は数百年にわたって育てるものであるというのが本当に実感される。